

ロレンスの詩的意匠：”Snake”の世界

吉村，治郎
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門・国際文化学講座

<https://doi.org/10.15017/7148421>

出版情報：言語科学. 45, pp.61-68, 2010-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



ロレンスの詩的意匠

——“Snake”の世界——

吉村治郎

序

第一次世界大戦中、妻の Frieda がドイツ人であることからロレンス夫妻は英国でスパイの疑いをかけられ厳重な監視の下に置かれていた。そうしたありもしない疑いにロレンスは相当不愉快な思いをしたようである。時には当局の不当な仕打ちに激昂さえしている。ただでさえ過敏な神経の持ち主であったロレンスにすれば絶えざる監視の目は神経を激しく逆なでするものであったことだろう。しかし、その戦争も終わり、彼は 1919 年、妻とともに英国を去ってイタリアへと出発する。そして 1920 年シシリー島のタオルミナでしばらく暮らすこととなる。さまざまな自然界の生命との出会いを主題にした *Birds, Beasts, and Flowers* という詩集は、戦争の不愉快な時期から解放され、経済面は別として、精神的に少しゆとりのあるこの時期に書きはじめられた。そして、成立年代については諸説あるが、1923 年に完成したとされている。そのせいか、ロレンス文学に特有ないらだちが比較的少なく、自然の世界と比較的静かに向き合っている姿勢が感じられる。ここで取り上げる“Snake”という詩はこの詩集の出色の作の一つであるが、おそらく、ロレンスがここで生活していた時、偶然出会った蛇を題材にしたものであろう。人間中心のヨーロッパ文化の中では学者的興味でもなければ、爬虫類や昆虫などの小世界に目を向ける人はまづいないであろうが、この詩は蛇を題材にした少し変わった詩である。しかし、蛇という題材の特殊性にもまして、蛇という生命の神秘的側面を余すところなく捉えた類例のない豊かな啓示性にその最大の特徴があるといつてよい。そこにこの詩の深みと魅力があるのであるが、おそらく自然との不思議な霊交能力と豊かな直感に恵まれたロレンスだからこそ書けた詩といえるであろう。しかし、そもそも直感で捉えた蛇の姿を言葉として表現することは相当難しいことである。“Snake”はそれに見事に成功した詩となっている。ロレンスはそれを達成するため詩の構成と措辞の面で細かい工夫を凝らしているようである。そこで、本稿ではまず、詩の流れに従って、ロレンスが直感でとらえた「蛇」をどのような技法で表現しているかを探ることにする。特に、この詩にあっては普通の「蛇」が次第に純粋な生命の精華へと変貌していく点に特徴があるので、その点に注意を向けながらそれがどのような技法で達成されているかを解明する。そして次に、ロレンスがこの詩で描き出している「蛇」の姿とはどのようなものなのか、またこのような生命との出会いは人間にとってどのような思想的意味があるのかも併せて探してみたい。

詩の構成

“Snake”は大きく三つの部分から構成されている。第一は、「蛇」の住む自然の世界に「私」という人物が入っていく場面である。第二の場面では「私」と「蛇」との神秘的な出会いが「私」の内面の変化を通して描かれている。第三の場面では、「私」は不思議な体験をしながらも、一転して恐怖に襲われる。そして、結局最後には丸太を投げつけて「蛇」を水飲み場から追い出してしまう。しかし、そのあと、「蛇」を追放した自分に対する強い嫌悪に襲われる。それでは、それぞれの場면을さらに詳しく見ていくこととする。

最初の場面は次のように始まっている。

A snake came to my water-trough
On a hot, hot day, and I in pyjamas for the heat,
To drink there.

In the deep, strange-scented shade of the great dark carobtree
I came down the steps with my pitcher
And must wait, must stand and wait, for there he was at the trough before me.¹

一匹の蛇が私の水飲み場にやってきた
ある暑い暑い日のことだ、私も暑いので
そこに水を飲みにやってきた。

大きなこんもりとした、不思議な香りのするサイカチの木陰、
私は水差しを持って階段を降りてきたが
私は待たねばならなかった、立って待たねばならなかった、そいつが先に水飲み場に来ていたからだ。

エトナ山が噴煙を上げるシシリー島の暑い暑い夏のある日、パジャマ姿のまま、「私」は水差しを片手に持ち、深い不思議な香りのするこんもりと茂ったサイカチの木陰の中、水飲み場の下りにいく。ところがそこには先客がいた。それは「蛇」であった。何気ない、一見平凡に見える一場面であるが、サイカチの深い香りが支配する、恐らく滴る水の音も響いているであろうこの水飲み場は時計という人工の時間が流れる場所ではなく、原初の時間が静かに流れる自然の世界である。Keith Sagar はこの場面にさらに深く踏み込んでその象徴性を次のように説明している。

These lines give such a strong sense of harmony embracing the whole scene that it seems a primal scene from before the fall, not only before the fall of man, but, as we shall see, before the fall of Lucifer.²

これらの詩行は場面全体を包み込むような強い調和感を醸しているので、墮落以前の原初の場面、単に人間の墮落以前だけでなく、ルーシファーが墮落する以前の場面のように見える。

Sagar はサイカチの木陰にあるこの水飲み場の場面をアダムとイブが追放される前に暮らしていた楽園のイメージで捉えている。確かに「私」は「水飲み場」を“my water-trough”と述べて、所有権を主張しているが、「蛇」を見て先客とみなして順番を待つ態度は、自分がその場の主人ではなく逆に客人という無意識の意識の表れと見てよいであろう。「私」の所有意識はどうであれ、「私」の方こそ客人なのである。人間界や文明を思わせる「水差し」をもっているところからわかるように、「私」は人間界からこの自然界へ「階段を降りてやってきた」(“I came down the steps”) ののである。階段はまさに人間界と自然界をつなぐ通路といえるだろう。このような設定によって、最初は一見平凡に見えた場面に深い意味が付与される。従って「私」はあのアダムとイブが喪失した楽園へ一時的にやってきた人間なのである。しかし、「私」はもはや墮落以前の無垢なアダムではない。聖書でいうところの墮落したアダムとして楽園に闖入してきたといえよう。

葛藤する二つの意識

「私」は「蛇」がこの楽園でのんびりと水を飲む様子を見守る。この時の「蛇」の動きと様子が次のように表現されている。

He reached down from a fissure in the earth-wall in the gloom
And trailed his yellow-brown slackness soft-bellied down, over the edge of the stone
trough
And rested his throat upon the stone bottom,
And where the water had dripped from the tap, in a small clearness,
He sipped with his straight mouth,
Softly drank through his straight gums, into his slack long body,
Silently.³(下線は筆者による)

そいつは暗い土塀の割れ目から身を乗り出し、
石の水ガメの縁に黄褐色のしなやかな体を横たえ、
喉を石の底に休めて、
水が流れ口から滴るところ、透明な水溜まりで、
そいつはまっすぐな口で水をすすり、
まっすぐな歯茎からゆっくりと水を飲んだ、ゆるやかな長い体へ、
音も立てずに。

頭韻と脚韻を意識的に使用して詩の形式を整えようとする意図が見られるが、それほど効果が上がっているとはいえない。形式よりもむしろ、聴覚と視覚の効果を狙っていると思われる。下線を施した上記の単語を見ればわかるように、「蛇」の動作と様子を説明するにあたってロレンスは意図的に“s”で始まる単語を多用している。これによって「蛇」のぬらりとした様子と、しなやかな体と動きが見事に表現されている。⁴また視覚的にも“s”という字形は「蛇」の柔軟な姿を連想させる機能を持っている。いずれにしてもここまではごく普通の「蛇」の様子が描写されているといっていよう。しかし、やがてロレンスはこの普通の「蛇」を高い次元の存在へと変えていく。もちろん「蛇」に何か外見上の変化が生じたというのではない、見る側の「私」の意識が変化するのである。

「私」は、普通誰でもするように、しばらく「蛇」を極く普通の「蛇」としてその様子を眺めていたが、突然、不思議な変化が訪れる。「私」自身、眼前にるのは「蛇」だと認識していたはずの「蛇」が突然「何者」(“Someone”) かに見えてくるのである。ロレンスは「私」に次のように語らせる。「何者かが水飲み場の私の前にいたのだ / そのため、私は二番手のように待っていた。」(“Someone was before me at my trough / And I, like a second comer, waiting.”⁵) 今まで単に一つの小動物としか見ていなかった「蛇」がにわかに犯しがたい「人格」と「威厳」を持った「何者」(“Someone”) かに変貌したのである。「何者かがいたのだ」という表現を導入することで、「蛇」はもちろん、「私」と「蛇」の偶然の出会い単なる卑近な日常の出会いではなくより大きな何か不思議な存在との遭遇であることが示唆される。そして、この詩の冒頭で「私」は意識の上では、この水飲み場を“my water trough”と呼んで、主人気取りで「蛇」を客人として扱っていたが、実は、「蛇」こそこの場を領する主であり、「私」のほうこそ、その場に何の断りもなく足を踏み入れた、いわば無遠慮な「客人」、さらにいうならば、「闖入者」であることが示唆される。しかし、この場面は、闖入者とはいえ、「私」は今まさに「蛇」と未知の遭遇を果たす可能性を秘めた瞬間に立ち会っていることも同時に暗示されている。

だが、褐色で土色がかった黄金色の「蛇」を目の前にして、「私」は「蛇」と未知の遭遇をすることをためらう。心の中で次のように叫ぶ声ができるからである。

The voice of my education said to me

He must be killed,

For in Sicily the black, black snakes are innocent, the gold are venomous

And voices in me said, If you were a man

You would take a stick and break him now, and finish him off.⁶

教育の声が私に言った

そいつは殺さねばならない、

シシリーでは黒い、黒い蛇は毒はないが、黄金の蛇は毒を持っているから

私の中で声がした、お前が男なら、
棒を取ってそいつをたたきのめし、息の根を止めるだろう。

「私」が今まさに未知との遭遇に参与しようとする、その瞬間、「私」を強引に引きとめるものがあつた。それは「私」が今まで受けてきた教育の声であつた。「蛇」についての教育や知識はシリ島の「蛇」は黒ならば無害だが、黄金なら毒蛇だと教える。教育や知識はいつも有効に働くとは限らない。時として偏見や先入観となつて人の目と心を曇らせ、対象の本質を見ることを妨げる。「私」の場合も教育のために心は恐怖で満たされ眼前の「蛇」を単なる毒蛇としか思わなくなる。しかし、この詩では、それでもなお、半分は「蛇」に好意を感じ惹かれる気持があることが記されている。「私」はいう、「だが、私はそいつが好きだと白状しなくてはならない / そいつは客人のように静かに私の水飲み場にやってきて、水を飲み / おとなしく、静かに、そして礼も言わずに / 燃える大地のはらわたの中へ去っていく / 私はそれがどんなにうれしかったことか。」(“But must I confess how I liked him, / How glad I was he had come like a guest in quiet, to drink at my water-trough / And depart peaceful, pacified, and thankless, / Into the burning bowels of this earth?”⁷⁾ Sandra M. Gilbert も指摘している通り、「私」の中で嫌悪と好意という二つの意識が葛藤しているが⁸⁾、この二つの葛藤する意識の導入はこの詩において大切な役割を持っているようだ。おそらく嫌悪を起こさせているのは知識と考えてよいであろう。一方、好意を感じさせているものは「私」の中の直感であろう。直感とは、ロレンスの言葉で言い換えるならば「血の意識」ということになろう。相反するこれら二つの意識を持ちだすことでロレンスは「蛇」を高度な存在へと引き上げようとしていると考えられる。「蛇」の本質を理解する方向へ導くものはもちろん「直観」、すなわち「血の意識」である。反対に理解を妨げるものは「知識」である。つまり、「蛇」の本質は人間の知的認識の埒外にある存在、言い換えれば、知的認識の彼岸にいたって初めて理解できる高度な存在と言ってよいであろう。「蛇」を理解するには知的理解よりもさらに高度な血の意識が必要なのである。

措辞と対置

これまで場面設定や葛藤する二つの意識の導入など、主として間接的手法に注目して「蛇」が次第に高次元の存在へ高められる過程を見てきた。これは、いわば黒を周囲に配置して真ん中の白を強調するといった手法であるが、この手法はロレンスの場合、細工を思わせる鑿の跡が全く感じられない自然なものである。この詩の高い完成度を示しているといえる。次に「蛇」を直接描いている場面に注目して、ロレンスの捉えた「蛇」の本質を見てみよう。

「蛇」の詩では、上に述べた二つの意識の葛藤が詩行の推進力となっているがその葛藤の合間合間に「蛇」の神秘的な動きと様子が描写されている。こうした葛藤と描写を交互に配列するやり方も意識的に導入され、「蛇」の高次元化に貢献していることはいうまでもない。葛藤とは、別の言葉でいえば、知的認識に動揺が起こっていることを示し、それは、「蛇」が知的認識力だけで

はとらえきれない高次の存在であることを物語ることになるからである。先に、二つの意識が葛藤する場面を引用したが、そのあとロレンスは「蛇」が水を飲み去っていく場面を設けて「蛇」の直接描写を行っている。おそらくこの場面はこの詩の中で最も印象的な部分と言ってよいであろう。

He drank enough
And lifted his head, dreamily, as one who has drunken,
And flickered his tongue like a forked night on the air, so black,
Seeming to lick his lips,
And looked around like a god, unseeing, into the air,
And slowly turned his head,
And slowly, very slowly, as if thrice adream,
Proceeded to draw his slow length curving round
And climb again the broken bank of my wall-face.⁹

そいつは十分飲んだ
それから頭をあげた、夢見るように、酔っぱらいのように、
それから真黒な、割れたフォークの夜のような舌を虚空に閃かせた、
唇をなめるように、
それから神のごとく、見るともなくあたりを見回した、
それからゆると、頭をまわした、
ゆると、本当にゆると、夢の夢を夢見るように、
曲がりくねるゆるとした体を引きずって、
壊れた壁面を再び登り始めた。

最初の二行では「蛇」が十分水を飲んだあと頭をあげる様子が描写されている。「蛇」は「酔っぱらい」(“drunken”)のように、「夢見るように」(“dreamily”)頭をもたげる。そして、次にあたりを見回すが、「蛇」の視線はやはり頭を持ち上げた時と同じで、はっきりとどこかを見据える視線ではない。その視線は「見るともなく」(“unseeing”)あたりを見回す視線である。そのあと、頭の向きをかえて方向転換する。すみかの穴に戻るためであるが、頭の回し方も「蛇」独特の「ゆるとした」(“slowly”)まわし方である。ロレンスはさらに言葉をつづけて、そのさまを「夢の夢を夢見るごとく」(“as if thrice adream”)と表現している。

「蛇」の動作と視線を表現するためロレンスは意識的に、“drunken”、“dreamily”、“unseeing”、“slowly”、“as if thrice adream”といった言葉を使っている。これら、一種の放心性を表す叙述語を使うことでロレンスは「蛇」を別次元の存在へと高めている。こうした巧妙な措辞によって人間とは異なる次元に住む存在としての「蛇」の神秘性と本質を余すところなく伝えているといえる。

また、自意識を持った「私」という人間と、「意識」という言葉の意味からいえば、「意識」というものを持っていない「蛇」、の両方を対置することで人間の本質と自然界の住人である「蛇」の両方の本質を見事に浮かび上がらせているといえる。「蛇」の動作と目の表情に現れた放心性は何を物語るものであろうか。もしかすると、それは分裂した二重の意識を持つ人間に固有な思念などは持ち合わせていない蛇の純粋な生命性を示すものであるかも知れないのである。また、「夢の夢を夢見るような」「蛇」のゆるやかな動きは、もしかすると、はるかに大きな宇宙の意志に従って生きているものの聖なる動きかも知れないのである。¹⁰一方、「私」に代表される人間はどうか。人間と他の動物とを分ける決定的資質であり、特権である自由意思と知識は果たして誇るに足るものであろうか。詩の中の「私」は、結局、恐怖に勝つことができず「蛇」に丸太を投げつけて追い払ってしまう。「私」は知識と自由意思のために、「蛇」が与えてくれた大いなる宇宙の生命の流れに参与する機会を失ってしまったのである。この詩における、人間である「私」と「蛇」の対置はそのような究極的問いかけに収斂していく。

結 び

ロレンスは、自然（コスモスといってもよい）は人間を超えた存在だという意識を持っていた。ところが現代は、人間と自然（コスモス）との間には大きな断裂が生じている。そのため、人間は暴走をはじめ、本来人間を超えた存在である自然やコスモスまでも自らの支配下に置こうと試みている。一人の人間だけでなく、科学的精神を本質とする現代文明全体がその方向に傾斜している。ロレンスはそこに文明の思い上がり、と、危険性を感じていた。現代文明に対する彼の激しい断罪の裏にはそのような危機意識があったからである。彼は現代科学文明を糾弾するかたわら、その救済策として自然（コスモス）への回帰を絶えず志向した。一度切れてしまった文明と自然（コスモス）との絆を取り戻すことが可能かどうか誰にもわからないが、ロレンスは真摯にそれを求めたのである。本稿で分析を試みた“Snake”の詩も、「私」は現代文明を代表し、「蛇」は自然（コスモス）を象徴すると読めば、自然との絆をいかにして取り戻すことができるかを実験している詩と読めるであろう。詩の中の「私」は結局「蛇」と決定的関係を結ぶことができずに終わるが、彼の年来の問題意識を精緻な措辞法と構成法によって無理なく表現した優れた作品である。また、文明と自然という大きなテーマとして読まなくても、ロレンスが「蛇」を通して伝える自然についてのメッセージは十分耳を傾けるに値するものだと思う。

注

1. D. H. Lawrence, *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, ed. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts, vol. 1(1964; London: Heinemann, 1974) 349.
2. Keith Sagar, *D. H. Lawrence: Life Into Art* (Athens: The University of Georgia Press, 1985) 235.
3. Lawrence, 349.
4. T. スレイド『D. H. ロレンス』山下主一郎訳 中央大学出版部 1975. 206 頁
5. Lawrence, 349.
6. Lawrence, 350.
7. Lawrence, 350.
8. Sandra M. Gilbert, *Acts of Attention* (Ithaca: Cornell University, 1974) 174.
9. Lawrence, 350.
10. 吉村治郎『ロレンスの文学と思想』開文社 2006. 94 頁を参考

参考文献

- Burgess, Antony. *Flame Into Being*. London: Heinemann. 1985.
- Chambers, Jessie. *D. H. Lawrence: A Personal Record*. Cambridge University Press. 1980.
- Lockwood, M. J. *A Study of the Poems of D. H. Lawrence*. London: Macmillan Press. 1987.
- Sager, Keith. *The Art of D. H. Lawrence*. 1966. Cambridge: Cambridge University Press, 1978.